

第1章

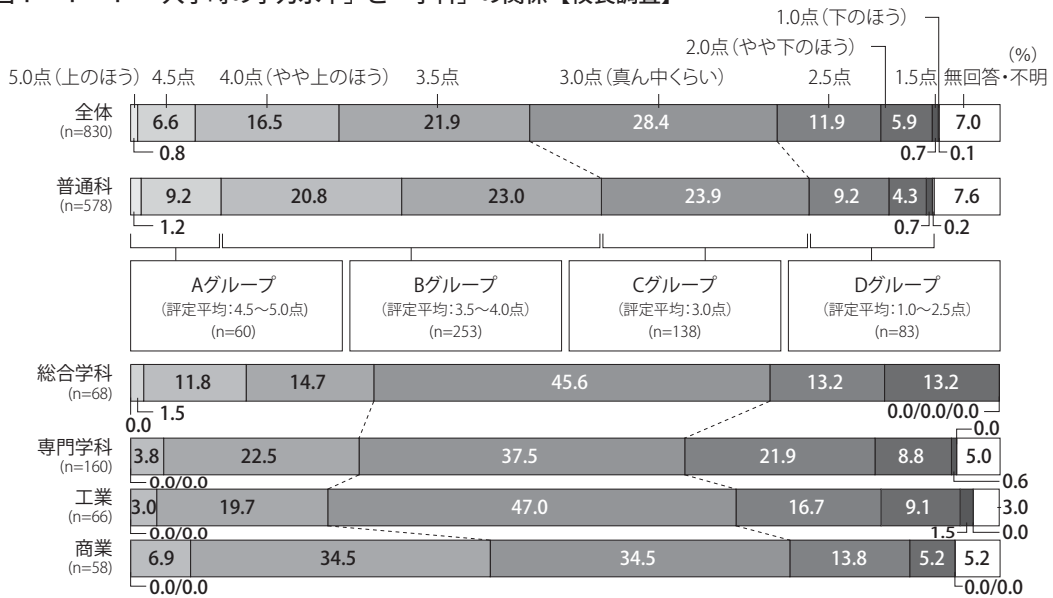
生徒の特徴

第1節 「学科」「入学時の学力水準※」による高校の分類

※「貴校に入学した平均的な生徒の中学校時代の成績（評定平均）」に関する校長の回答を用いた。
以下では、単に「入学時の学力水準」と表記する。

学科別に入学時の学力水準をみてみると、普通科がもっとも高く、次に総合学科、そして専門学科が続く。普通科については、「3.0点」「3.5点」「4.0点」の比率がそれぞれ約2割ずつとなっており、同じ普通科のなかでも、入学時の学力水準にばらつきがあることがわかる。

図1-1-1 「入学時の学力水準」と「学科」の関係【校長調査】



「貴校に入学した平均的な生徒の中学校時代の成績（評定平均）」(以下、「入学時の学力水準」)に関する校長の回答をみてみると、全体では、「3.0点」の比率が28.4%でもっとも高く、次に「3.5点」が21.9%と高くなっている(図1-1-1)。「3.0点」から「5.0点」までの比率を合計すると、74.2%に達することから、約4分の3の高校で、「真ん中くらい」とされる評定平均「3.0点」以上の生徒が入学していることがわかる。次に、学科別に入学時の学力水準をみてみると、「3.5点」以上の比率(「3.5点」「4.0点」「4.5点」「5.0点」の合計、以下同)が、普通科

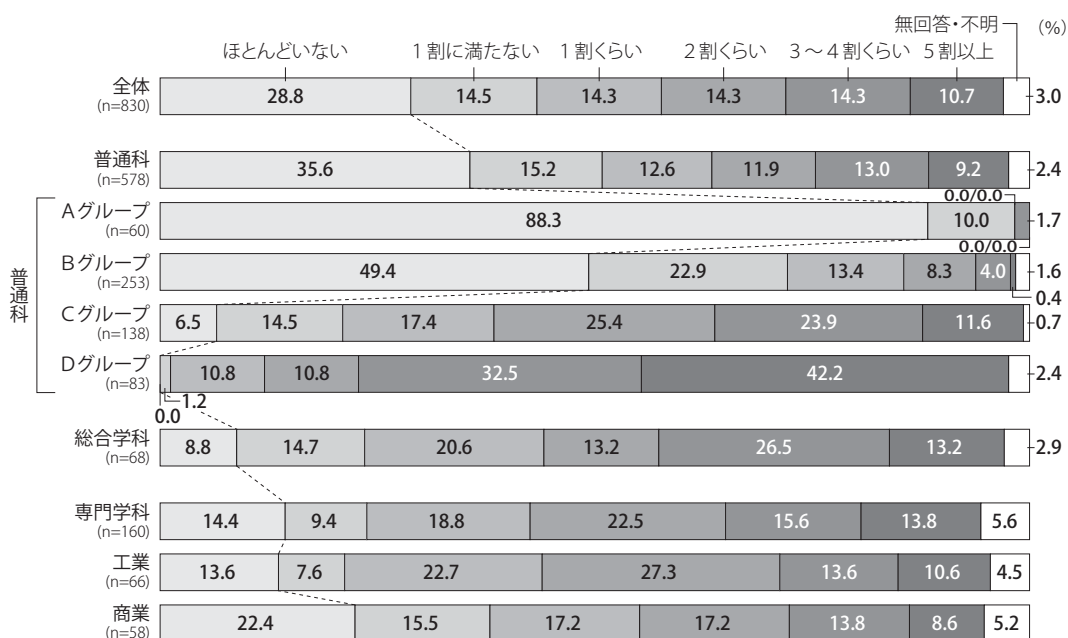
(54.2%)>総合学科(28.0%)>専門学科(26.3%)となっていることから、普通科の入学時の学力水準がもっとも高く、次に総合学科、そして専門学科が続くことがわかる。なお、普通科については、「3.0点」「3.5点」「4.0点」の比率がそれぞれ約2割ずつとなっていることから、同じ普通科のなかでも、入学時の学力水準にばらつきがあることが推察される。そのため、本報告書では、入学時の学力水準に基づいて普通科A~Dグループの4つのグループに分けて、分析を進めることにする。

第2節 生徒の特徴

2-1 学校レベルからみた生徒の特徴

「義務教育段階の学習内容が十分定着していない生徒」が「ほとんどいない」高校は、全体の約3割。普通科Dグループでは、「義務教育段階の学習内容が十分定着していない生徒」のほか、「経済的に困難を抱えている家庭の生徒」「親が子どもの学習に対してほとんど関心を持たない生徒」の割合も高い。基礎学力および家庭背景に困難を抱えている生徒が多いことが推察される。

図1-2-1 義務教育段階の学習内容が十分定着していない生徒の割合【校長調査】



「義務教育段階の学習内容が十分定着していない生徒」の割合を校長にたずねたところ、「ほとんどいない」と回答した比率は28.8%であった(図1-2-1)。ここから、その他の約7割の高校では、義務教育段階の学習内容が未定着な生徒を抱えていると考えられる。学校種別にしてみると、普通科Aグループでは「ほとんどいない」と回答した比率が88.3%ともっとも高くなっているのに対して、普通科Dグループでは「ほとんどいない」と回答した比率は0.0%ともっとも低く、逆に「5割以上」と回答した比率が42.2%ともっとも高かった。総合

学科、専門学科では「ほとんどいない」と回答した比率が、それぞれ8.8%、14.4%であった。

「経済的に困難を抱えている家庭の生徒」の割合についてみると、全体では「1割に満たない」と回答した比率が31.9%ともっとも高く、「ほとんどいない」と合わせると41.1%であった(図1-2-2)。学校種別に「1割以下」(「ほとんどいない」「1割に満たない」の合計、以下同)と回答した比率をみると、普通科Aグループでは85.0%であるのに対して、普通科Dグループでは6.0%であった。

I 生徒・学校の特徴と教育課程の編成

図1-2-2 経済的に困難を抱えている家庭の生徒の割合【校長調査】

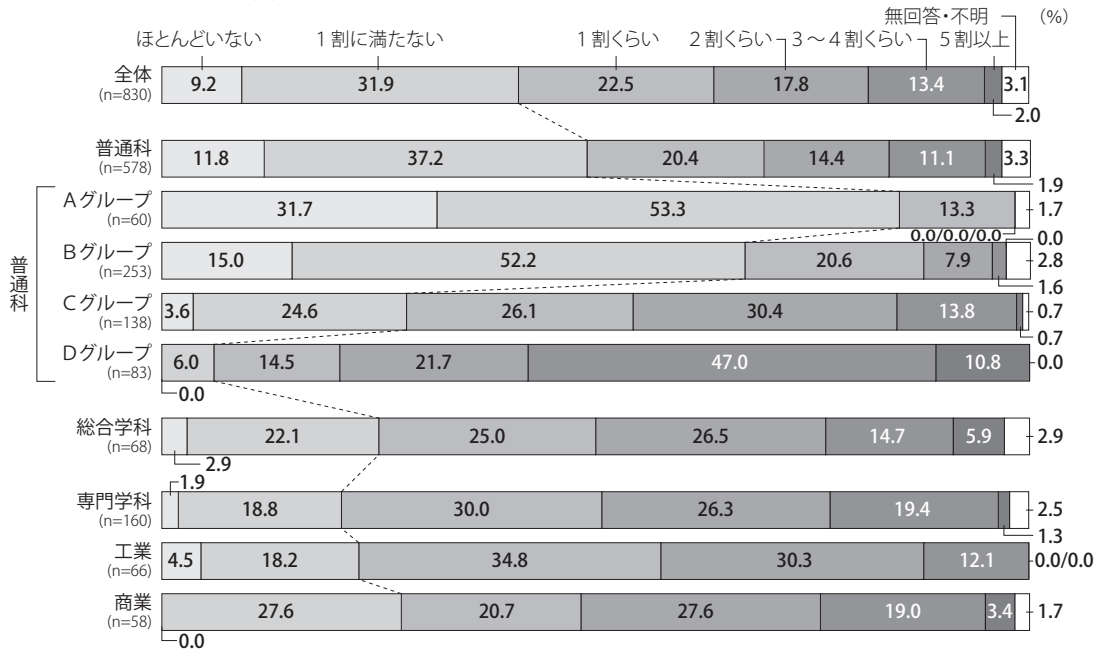
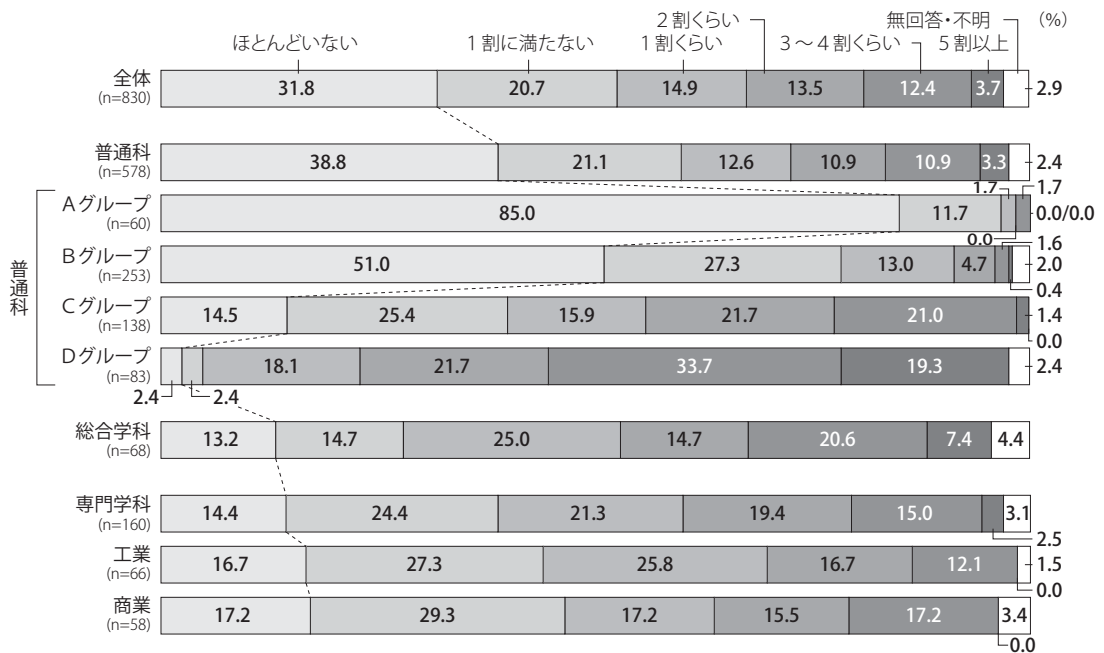


図1-2-3 親が子どもの学習に対してほとんど関心を持たない生徒の割合【校長調査】



次に、「親が子どもの学習に対してほとんど関心を持たない生徒」についてみると、全体では「ほとんどいない」と回答した比率が31.8%ともっとも高い（図1-2-3）。学校

種別に「ほとんどいない」と回答した比率をみると、普通科 Aグループでは85.0%であるのに対して、普通科 Dグループでは2.4%であった。

図1-2-4 長期欠席の生徒（昨年度）の割合【校長調査】

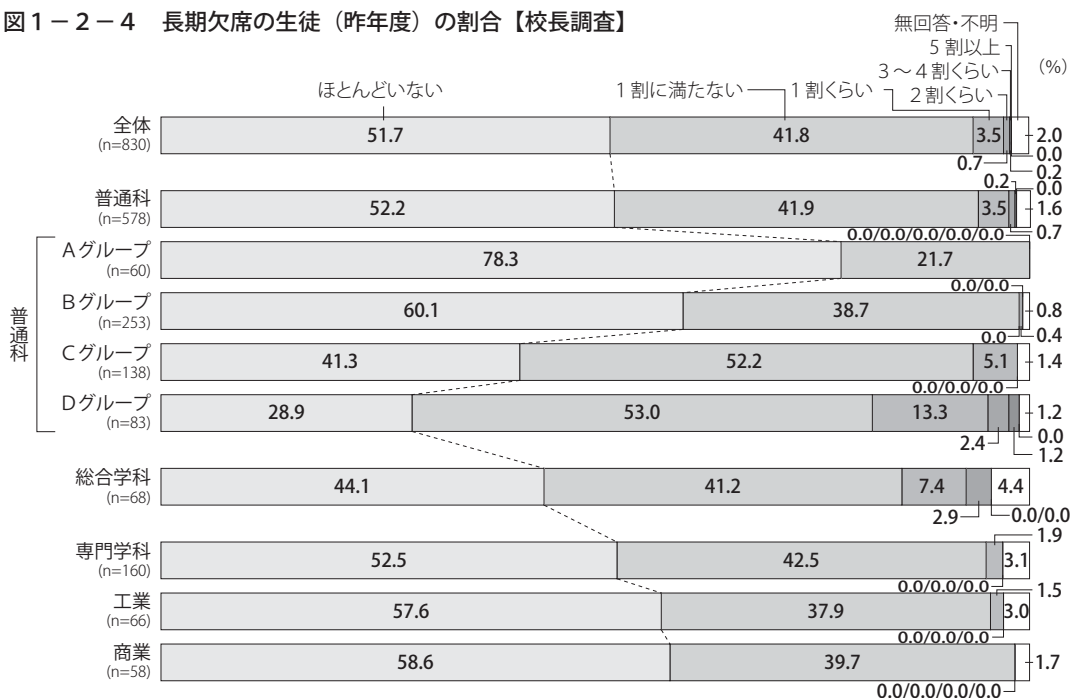
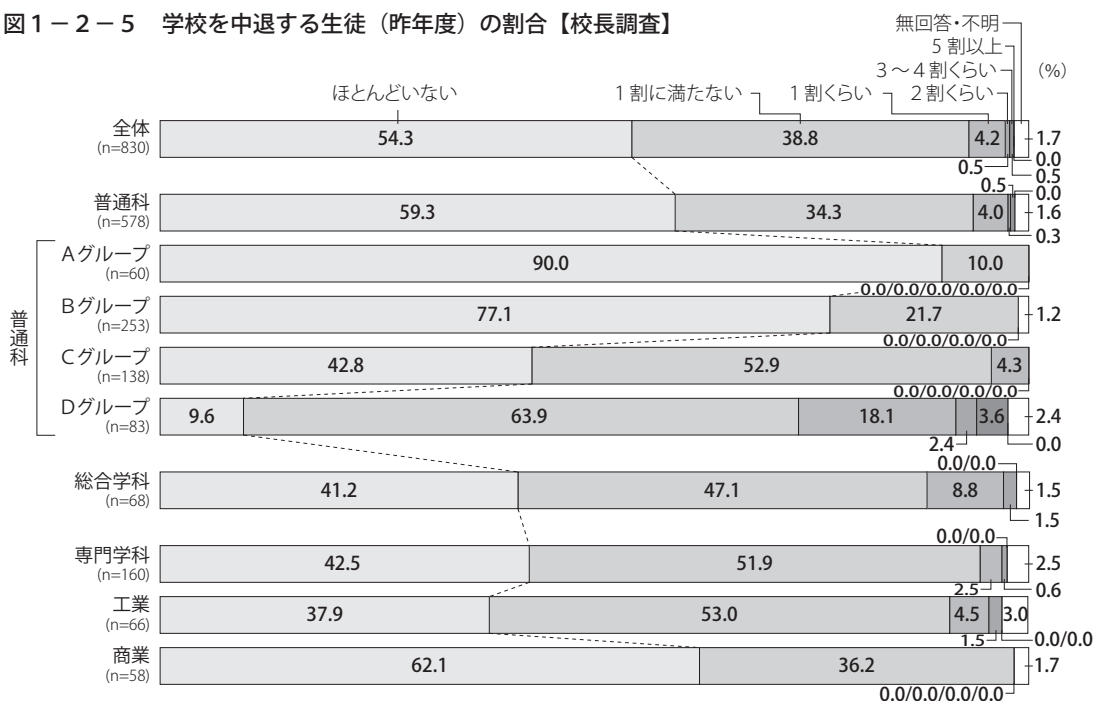


図1-2-5 学校を中退する生徒（昨年度）の割合【校長調査】



「長期欠席の生徒」について学校種別に「ほとんどいない」と回答した比率をみると、普通科 A グループでは 78.3% であるのに対して、普通科 D グループでは 28.9% であった (図 1-2-4)。

次に、「学校を中退する生徒」について学校

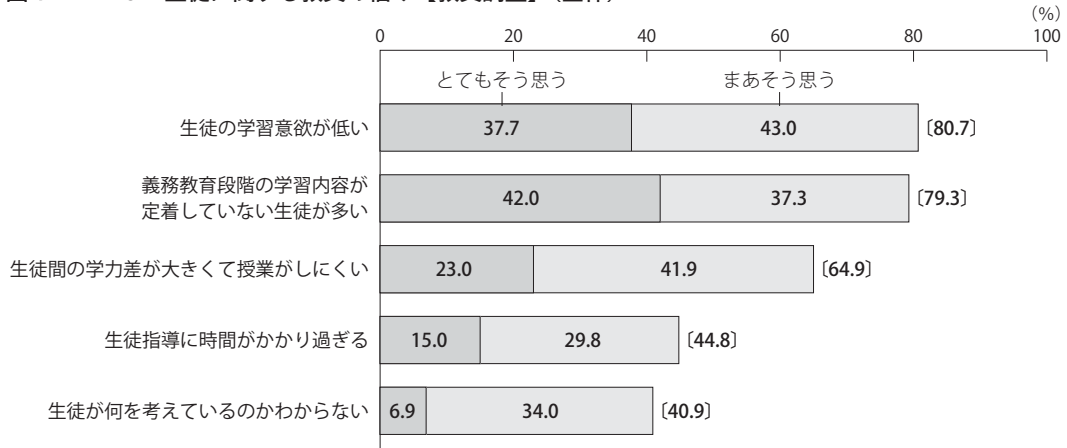
種別に「ほとんどいない」と回答した比率をみると、普通科 A グループでは 90.0% であるのに対して、普通科 D グループでは 9.6% であった (図 1-2-5)。専門学科のなかでも商業では、「ほとんどいない」の比率が 62.1% と工業 (37.9%) に比べて高かった。

I 生徒・学校の特徴と教育課程の編成

2-2 教員の悩みにみる生徒の特徴

約8割の教員が、「生徒の学習意欲が低い」「義務教育段階の学習内容が定着していない生徒が多い」ことに悩んでいる。とくに普通科Aグループ以外の高校において、上記2項目に対して悩んでいる教員が多い。学校種別にみても、とりわけ普通科Dグループで、さまざまな悩みを抱える教員の比率が高くなっている。

図1-2-6 生徒に関する教員の悩み【教員調査】(全体)



注1) 教員の悩みについてたずねた15項目のうち、生徒に関する5項目のみを示した。
 注2) []内は「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%。

表1-2-1 生徒に関する教員の悩み【教員調査】

	全体 (n=3,070)	普通科 (n=2,228)	Aグループ (n=246)	Bグループ (n=976)	Cグループ (n=507)	Dグループ (n=308)	総合学科 (n=227)	専門学科 (n=512)	工業 (n=229)	商業 (n=164)
生徒の学習意欲が低い	80.7	78.3	49.2	76.6	92.9	91.3	89.5	87.3	86.4	82.9
義務教育段階の学習内容が定着していない生徒が多い	79.3	76.2	43.0	72.2	91.7	93.8	87.7	89.0	89.9	86.6
生徒間の学力差が大きくて授業がしにくい	64.9	63.1	45.5	57.6	74.9	77.6	71.4	71.1	76.0	59.8
生徒指導に時間がかかり過ぎる	44.8	40.9	13.8	28.4	59.1	74.4	58.2	55.3	57.2	46.3
生徒が何を考えているのかわからない	40.9	38.0	22.3	33.4	47.2	52.3	45.8	50.6	48.9	49.4

注1) 「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%。
 注2) 教員の悩みについてたずねた15項目のうち、生徒に関する5項目のみを示した。
 注3) ○は全体よりも5ポイント以上、●は10ポイント以上高いものを示す。
 注4) 〃は全体よりも5ポイント以上、〃は10ポイント以上低いものを示す。

教員に生徒に関する悩みをたずねたところ、「生徒の学習意欲が低い」と「思う」(「とてもそう思う」「まあそう思う」の合計、以下同)と回答した比率は80.7%、「義務教育段階の学習内容が定着していない生徒が多い」と「思う」と回答した比率は79.3%と高かった(図1-2-6)。これを学校種別にみても、普通科Aグループ以外では、「生徒の学習意欲が低い」「義務教育段階の学習内容が定着していない

生徒が多い」と「思う」と回答した比率が7~9割と高くなっていることから、これらが教員にとって主要な悩みとなっていることがわかる(表1-2-1)。普通科Dグループでは、いずれの項目においても、「思う」と回答した比率が全体よりも10ポイント以上高くなっていることから、教員がさまざまな悩みを抱えていることがうかがえる。

第3節 教員からみた保護者の変化

数年前に比べて、「学校に協力的な保護者」「教師の指導を信頼している保護者」は「変わらない」、「学校にクレームを言う保護者」は「増えた」と回答した教員の比率がもっとも高い。「子どもに無関心な保護者」は、普通科Dグループで「増えた」と回答した比率が65.3%と高かった。

図1-3-1 学校に協力的な保護者【教員調査】

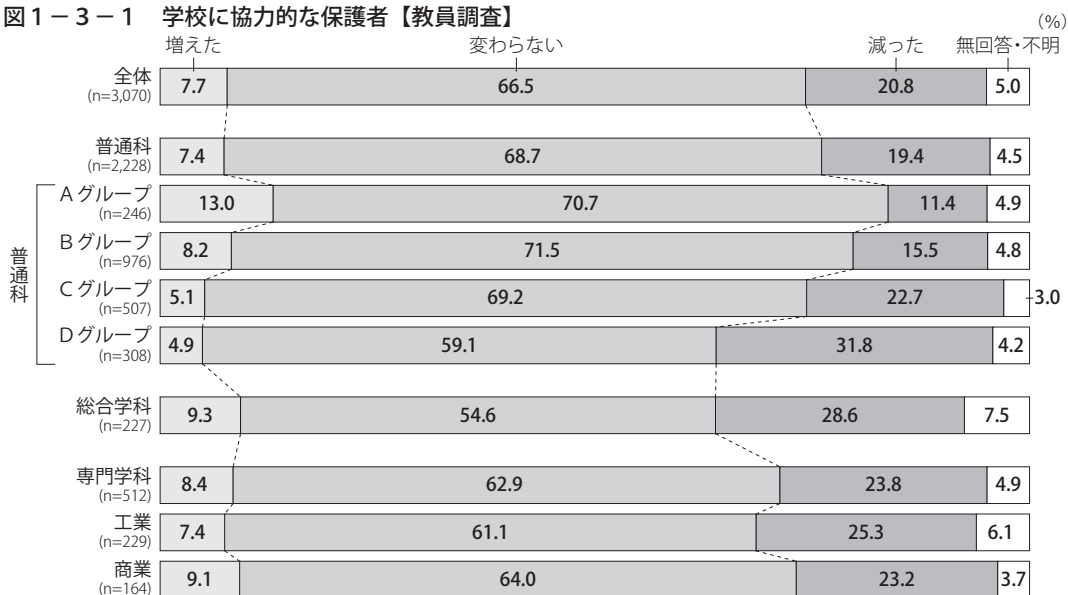
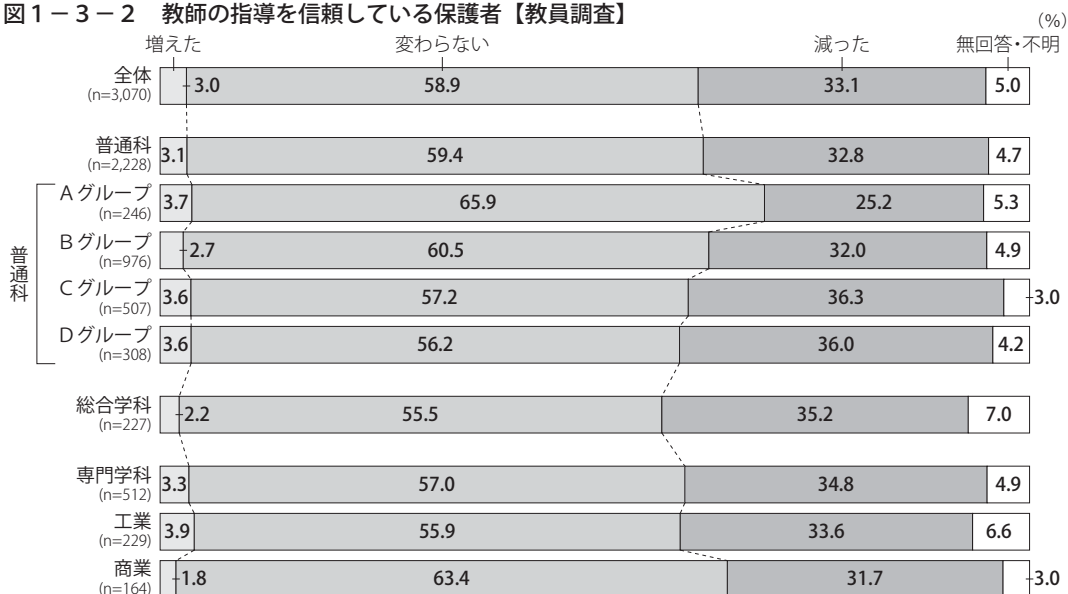


図1-3-2 教師の指導を信頼している保護者【教員調査】



教員に数年前と比べてときの保護者の変化についてたずねた。「学校に協力的な保護者」については「変わらない」と回答した比率が5～7割と最も高く、「教師の指導を信頼している保護者」については「変わらない」と回答

した比率が6割前後でもっとも高かった(図1-3-1・2)。一方、「学校にクレームを言う保護者」については、「増えた」と回答した教員の比率が6～7割と最も高い(図1-3-3)。

I 生徒・学校の特徴と教育課程の編成

図1-3-3 学校にクレームを言う保護者【教員調査】

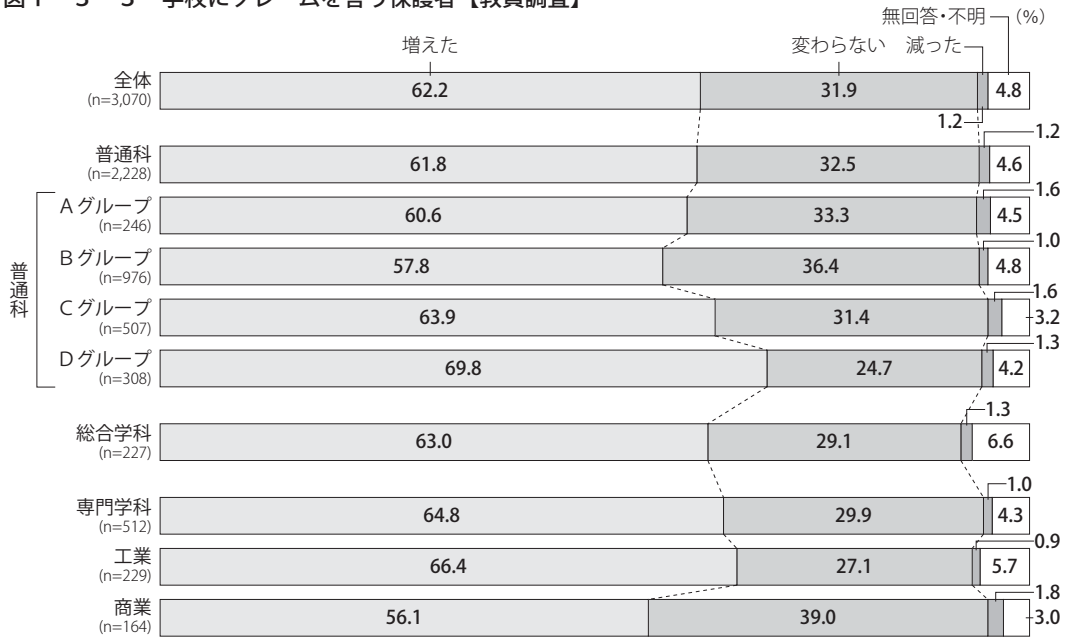
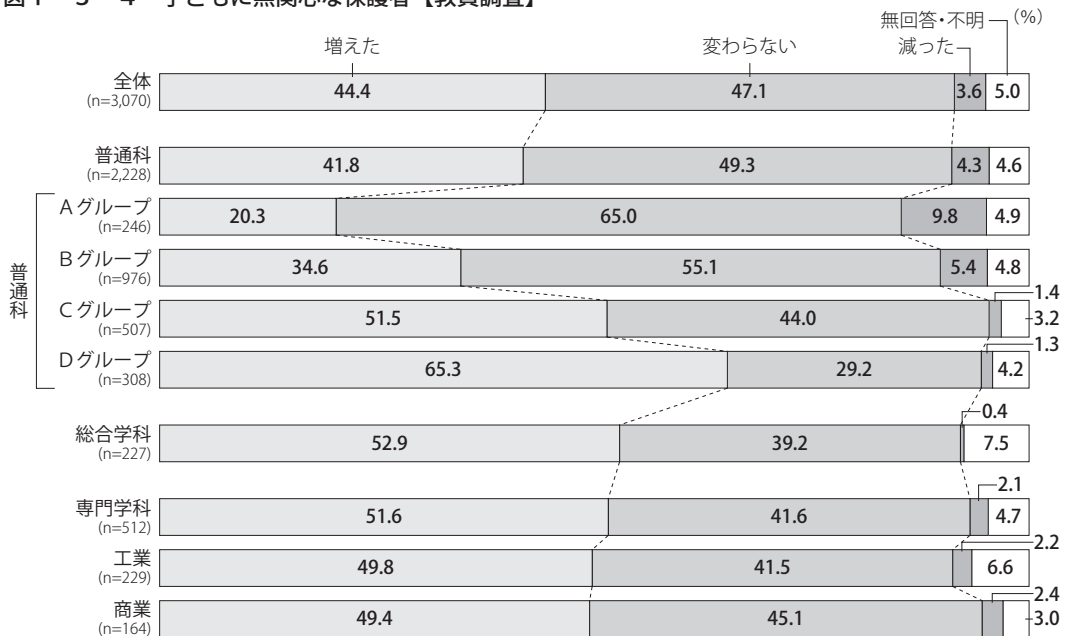


図1-3-4 子どもに無関心な保護者【教員調査】



以上の3項目の傾向については、学校種によって大きな差がみられなかった。これに対して、「子どもに無関心な保護者」については、普通科Aグループと普通科Bグループでは、「変

わらない」と回答した比率がそれぞれ65.0%、55.1%ともっとも高くなっているが、普通科Dグループでは「増えた」と回答した比率が65.3%ともっとも高かった(図1-3-4)。

第4節 中高接続の課題（高校から中学校への要望）

校長に、中学校への要望を自由記述形式で回答してもらった。内容を大きく分類すると、「基礎学力・学習習慣の定着」に関する要望が多くみられた。その他、「生徒指導（生活習慣の確立を含む）の充実」「中高連携の促進」「進路指導の充実」に関する要望もみられた。

■「基礎学力・学習習慣の定着」について

- 「基礎・基本の定着の徹底をお願いしたい。本校の生徒の6割強は中学卒業程度の学力をもっていない現状がある」（男性、59歳、普通科）
- 「入学生の中に、四則演算が十分にできない、アルファベットが十分に書けない生徒がいる。高校に入る前に責任をもって指導してほしい」（男性、58歳、専門学科）
- 「自ら進んで取り組む学習習慣をしっかり身につけさせてほしい」（男性、58歳、普通科）
- 「家庭学習の習慣化に取り組んでほしい」（男性、57歳、普通科）
- 「学ぶことの意義を理解し意欲を持たせること、読み書き計算の基本を定着させることが必要」（男性、56歳、普通科）

■「生徒指導（生活習慣の確立を含む）の充実」について

- 「マナー（あいさつ、礼儀等）を身につけて高校に入学してきてほしい」（男性、58歳、普通科）
- 「基本的な生活習慣の確立をお願いしたい。他者とかかわる力を身につけてほしい」（男性、57歳、普通科）

■「中高連携の促進」について

- 「学習指導・生徒指導ともに、もう少し連携をすすめていく必要がある」（男性、58歳、普通科）
- 「中高の授業をお互い見学しながら授業を改善し、研修を深めていく。生徒の質の変化について意見交換会を催してはどうか」（男性、58歳、普通科）
- 「中学校での生活状況等についての情報交換がほしい」（男性、60歳、普通科）

■「進路指導の充実」について

- 「進路指導が、いまだに『輪切り』的な発想から抜け出していないため、学校や学科についてよく理解しないまま入学してくる生徒が多い。キャリア教育の充実を期待したい」（男性、53歳、総合学科）
- 「キャリア教育、とくに職業を考える教育をきちんとやってほしい。どんな職業を目指すか、そのために何を学ぶか。そこから、どんな高校・学科へ行くかを指導してほしい」（男性、57歳、専門学科）